

救出のため、未来の私達のため

鹿児島県立川内高等学校 二年 羽島 奈穂

「先見えぬ 長き道のり 耐えて来た 安堵する日は いつの事かと」市川龍子作

四七回目の夏も「ただいま」の声はなかつた。

私は中三の時から拉致問題に关心を持ち、鹿児島の拉致被害者市川修一さんの兄、健一さん龍子さん、ご夫妻の署名活動などを共にしている。今年の二月には、通う高校の全校生徒に私が書いた拉致問題解決を願う作文を朗読した。私の作文が拉致問題を考えるきっかけになるよう願いを込めた。紙一杯に思いを綴つてくれた友達の感想には、少しずつ解決を願う輪が広がっていると思った。しかし僅か一行のみの感想、そして署名活動では多くの若者が他人事のように目の前を通り過ぎるのも現実だった。その関心の薄さに「このままではいけない」という思いを募らせた私は、拉致問題に关心を寄せる鹿児島の高校生七人と「鹿児島ブルーリボンかえるの会」を立ち上げ、「高校生による若者の為の拉致問題勉強会」を実施することにした。企画・運営・参加者募集など課題も山積していたが、多くの方々のサポートにより当日は中学生から大人の方まで約三五名にご参加いただいた。勉強会における市川さんご夫妻の講演に、参加者は涙を浮かべ聴き入っていた。その講演の中で私が最も印象に残った言葉がある。

「もし、修一が拉致されていなかつたらどんな生活を送っていたのだろう。修一にはもつと楽しい青春があつたのではないか。」

と。また、会場には市川龍子さんが拉致問題への想いを綴つた短歌集も展示した。

「彼の国へ 助けを求める弟に 届けとばかりに 声を涸らして」

この歌は、ご家族が朝鮮半島の北緯三八度線の前で「修一どこにいるの、姿を見せて」と呼び続けた、という龍子さんのお話と重なつた。そして、私には一番伝えたい歌がある。

「彼の国へ 飛んでいきたい 今すぐに 翼が欲しいと 母の声かな」

可能ならば自らの手で日本に連れて帰りたい。いつまでも救い出せない苛立ちや怒り、悲しみ。この短歌には全拉致被害者家族の切実な願いが込められている。生まれる前のこと、忘れてはいけないこと。しかし多くの若者は「知らない、分からぬ、怖い」という理由で拉致問題に触れようとしない。そもそも触れる機会が少ないのだ。だからこそ、大人も含め学校や家庭の中でもつと語り続けられいくべきだと私は訴えたい。問題の風化を最も恐れる拉致被害者家族の皆様。全拉致被害者救出のため、二度と拉致事件を起こさせないために「風化させない」という言葉があるのだ。

私は拉致被害者家族の皆様にこう伝えたい。

「一緒に頑張りましょう。」

と。これからも「楽しい青春」を希求する日本の若者の一人として声をあげ続けたい。